

「わたしたち」の拡がりを目指して

走井 洋一（東京家政大学家政学部准教授）

古来、私たちは「正しい社会」の存在を確信し、それを探究すること続けてきたといつてよい。アリストテレスは人間をポリス的人間と形容したが、ここには人間が正しい社会を構成するものであるという認識が前提にされていた。おそらく、私たちがなにかしかの社会のなかで生まれ出てきたため、社会の存在を自明視して、その社会がよりよいもの、より正しいものを志向すべきだとして、「正しい社会」の探究を行ってきたのであろう。

しかし、卵が先かニワトリが先かではないが、まちがいなく私たち人類の存在のほうが社会の構成よりも早い（その場合の人類をどう定義するかという問題は残るが…）。だとすれば、「私」という個人がなにかしかの社会のなかで生まれ出てきたとしても、人類という範囲で考えれば、「正しい社会」を措定する議論の進め方そのものが誤っているのであつて、社会がなぜ生起するのか、ということこそが問われなければならないはずである。

実は協同組合も同様で、ロッチデールはまさに彼らの生活困窮のゆえに「協同」が生起したのであつて、最初から協同的な組織ないしは協同組合を目的としていたわけではない。

このことは人間の本性（生まれもつての性質）に適つてるといつてよい。人間の本性をどのように捉えるのかを確定するには私たちの研究はまだ途上であるが、それでも私たちは他者と協同することを志向していることが近年の研究で明らかになりつ

つある。ごく単純にまとめてしまえば、私たちは「わたしたち」という範囲に対する関心を強くもち、その利益を資するように行動しようとする傾向性を有していることが明らかになっている。

私たちは「わたしたち」の利益と無関係なことについて協同することは難しい。それどころか、「わたしたち」の協同は「わたしたち」の利益（＝「相利性」）のためにこそ機能するとさえいえるだろう。

これは、私たちが協同することに意味がないといつてのではない。むしろ、この事実のうえに「協同する」とはどういうことかを考える必要があるのではないかという問題提起である。実はこれは目新しいことではなく、レイドロウ報告のなかで「普通一般には、人間個人は、生き残るために他人と協同しあわねばならない」（日本協同組合学会訳編 [1989]『西暦2000年における協同組合』日本経済評論社、p. 126）とすでに述べられていた。すなわち、私たちは「わたしたち」自身の生存というお互いの利益（「相利性」）のために協同せざるをえないのである。

ただ、もし私たちの協同が「わたしたち」の利益にのみ関心づけられているとすれば、私たちは相利的な関係にあるものの間でしか協同できないということになる。しかし、これは逆に捉えれば、相利的な関係を拡大していくこと、つまり「わたしたち」の範囲を拡大することで協同を拡げていくことは可能だろう。ここにこそ、協同組合の未来を拓くことができるのではないだろうか。